

## 「途上国と援助の非常識

日本は現場主義にこだわろう」

今開発援助の潮流は援助協調へと傾いている。しかし日本は、人を出すプロジェクトにこだわろう。現場での学びを積み重ね、効果を高めていけば、潮流が変わり、日本のアプローチが世界をリードする時がきっと来る。

## 日本らしくなくて良い

「日本らしい援助」以前から援助の世界ではよく耳にする言葉である。しかし、その定義は？ インターネットで調べてみると驚くなけれ、「日本らしい援助」という言葉が含まれているホームページはわずかである。主要な援助団体はどれも「日本らしい援助」を定義していないようである。

「日本らしい援助」が語られる時、ほとんどの場合に共通している点がある。それは「日本は他のドナーとは違う」ことを強調するために「日本らしさ」という言葉が使われている点である。すなわち「他のドナーとは違うこと」こそが「日本らしい援助」であり、推進すべきものとされている傾向がある。

私はこのような「日本らしさ」にはずっと懐疑的である。その理由は、援助をされる人々の「自分らしさ」が語られない点に違和感を覚えるからである。援助をされる人々が「自分らしさ」を実現できる援助、それが援助される側が求めるものでないかと思う。たとえば、タンザニアで代表的な参加型のアプローチである PRA(注 1)を実践したら、貧しい牧畜民の村2ヶ所で村人がほぼ自力で小学校を建てた。住民たちの工夫で進むプロセスを目の当たりにする機会が得られた私には、援助する側が「自分たちらしさ」をまず強調するのにはどうも馴染めないのである。

タンザニアの村に通い始めたばかりの頃、村の集会で私たちには常に上座が用意されていた。それが回を重ねるにつれ、私たちの席は脇に用意されるようになった。村の人たちが「自分たちらしく」振舞うようになったと私は解釈している。それは別に日本らしい援助の結果ではない。

## 現場にこだわりを

ところが最近の世界の援助の趨勢を見るにつけ、「アンチ日本らしい援助」の私も、他の援助国や援助機関との違いを日本はもっと強調してよいと思うようになってきた。それは、プロジェクト実施のような援助機関による直接援助ではなく、「コモン・バスケット」「セクター・プログラム」など、各国・各援助機関の支援をまとめて特定のセクターごとの計画などに資金を注入する支援の方法論が台頭してきたからである。

無論協調や調整をして援助を行うことは必要と考えるが、なぜ「コモン・バスケット」のようなアプローチに否定的なのか。理由は二つある。

第一にどこでも普遍的に機能するアプローチだとは思えないこと。なぜこれほどまでに多様性が強調される時代においてまで、ひとつの方法論を普遍的に当てはめようとするのか理解に苦しむ。

そして第二はもっと重要であるが、学ぶ機会が失われるからである。援助する側も自らが現地に足を運び、現地の人々と失敗と工夫を重ねて進んでいくプロセスから学ぶことは非常に大きい。そのような協力が実を結ぶまでには時間がかかることもあろう。しかし、自ら足を運ぶことなく資金の投入を行うだけのアプローチでは、何がどう人々の発展に繋がるかを、学ぶことができなくなってしまう。それは何がどう機能して人々の自立的な発展が可能となるかという一番重要なメカニズムの形成を欠くことを意味する。

ロバート・チェンバースは新著「Ideas for Development」で同じ嘆きを書いている。住民と接する参加型アプローチの効果効率の高さを普段から強調しているチェンバースには、「コモン・バスケット」のようなアプローチが、開発の世界が

やっと掴んだ成果をないがしろにした後退に見えることであろう。私も同感である。

## 顔を見る援助をしよう

私は1980年に青年海外協力隊員として援助の道に入ったが、本当に援助の効果を実感できたのは、20年後のタンザニアが初めてであった。その後赴任したセネガルでは、援助が触媒となって住民自身の自主的な活動をさらに効率よく発現する方法があるのに気がついた。それが通称「PRODEFI モデル」(注 2)と呼ばれるものである。私が学び続け、次第に効果効率が高いアプローチに気づくことができたのは、実際に現場で働き、工夫する機会があったおかげである。

プロジェクトを中心とした人を送るアプローチが主体の日本の援助機関には、昨今の援助の潮流に戸惑いがあるように見受けられるが、この際「日本らしい援助」を実現するためであってもよい。踏ん張ってぜひ現場主義を貫き通していただきたい。きっとまた援助の潮流が変わる時が来る。

しかし私が強調するのは、単に日本人を送ればよいということではない。協力隊は別にして、日本人は現場に行っても裏方に徹するべきだと思っているし、顔を見せるのを目的としたような「顔の見える援助」も胡散臭く感じる。

こうした援助は「顔を見せる」援助で「顔を見る」援助になっていないからである。顔を見る援助とは、人々を見、人々の実感を尊重し、変化を見つめ、そして共に工夫する過程である。物理的に顔を見せたところで、発展の実感がなければ途上国の人たちは日本人のことなどすぐに忘れてしまうだろう。一方裏方に徹していても、自分たちの発展を本当に助けてくれた人たちの存在はちゃんと見ているし、忘れないものである。

注1:PRA (Participatory Rural Appraisal; 参加型農村調査) 地域住民の参加を促進することによって調査の効果効率を高める手法。

注2:筆者が発案した、住民向けの研修を中心とした村落振興・参加型開発のアプローチ。モデルとなったプロジェクト名(JICA「セネガル総合村落林業開発計画」)のフランス語の略称をとって称している。

のだ なおと

1958年愛知県生まれ。三重大学農学部卒業後、協力隊員としてホンジュラス、ネパールで活動。その後 JICA 専門家としてケニア、タンザニア、ボリビア、セネガルなどで勤務。参加型に関する著書・翻訳書多数。現在(有)人の森(<http://www.hitonomori.com>)を立ち上げ、開発協力の研修コースを提供。